

『大般涅槃經』(南伝)における釈尊「三ヶ月後の入滅」の意味  
相愛大学 新井俊一

小論は中村元訳『ブッダ最後の旅 ー大パリニッバーナ経ー』(岩波文庫)を主たる資料として論を進めて行く。

釈尊は最晩年に、アーナンダおよび数人の弟子とともに、王舎城近郊の「鷲の峰」を去り、北方に向かって旅に出る。ヴェーサーリーに滞在中、悪魔が近づき、「今や釈尊の弟子たちは皆教えを体得して不動の信念を得、勝れた弁舌の力で人々を導くとともに、敵対者を完全に論駁できるようになったから、もう心おきなく入滅するべきだ」と釈尊に言う。ところが釈尊は、「悪しき者よ。修行完成者のニルヴァーナは今から三ヶ月過ぎて後におこるであろう」という(p.71)。この「三ヶ月」の意味を考えて行こう。

長年釈尊に侍して、釈尊の身の回りの世話をしていたのはアーナンダであった。アーナンダは釈尊の説法を一部始終聞いて暗記していたけれども、釈尊の在世中は悟りを得ていなかった。上記に挙げた釈尊と悪魔との対話の直前にも、釈尊がアーナンダに対して「(如来は)もしも望むならば、寿命のある限りこの世に止まるであろうし、あるいはそれよりも長い間でも留まり得るであろう」と延命の可能性をほのめかしたにもかかわらず、アーナンダは釈尊に、もっと長く生きて多くの人を導くように、とお願いしなかった(p.68)。ところが釈尊が悪魔との会話の内容を話すと、アーナンダはこの重大さに気づき、釈尊に、もっと長く生きて多くの人々の利益を与えるように懇願する。釈尊の言葉が始めてアーナンダの心に届いた一瞬であった(p.85)。

釈尊はアーナンダの要請を退けて、今までに16回同じことをほのめかしたのに、どの場合にもアーナンダは如来に延命を懇願しなかった。そして「それはお前の罪である。これはお前の過失である」と厳しくアーナンダを非難し続ける(p.87-93)。

筆者は釈尊のアーナンダに対する度重なる非難の中に重要な意味を見出すのである。経の終わり近くになると、釈尊は他の修行僧たちに「アーナンダは賢者である」と讃え(p.138)、さらに自分の遺体の処理の仕方もアーナンダに託し(p.132)、自分の亡き後は「私が説いた教えと私の制した戒律とが、私の死後にお前たちの師となるのである」(p.135)というように、法の委嘱もしている。

ここで目を漢訳の『大般涅槃經』に目をむけると、極悪非道の阿闍世王が自分の犯した重罪の意識に責められ、重い皮膚の病気を患っている時、耆婆大臣の勧告によって霊鷲山におられる釈尊に会いに行こうとする。その時釈尊は大般涅槃の直前であったが、阿闍世王が来ることを智慧で知り、煩惱具足の衆生の代表である阿闍世を救うまでは涅槃には入らない、と釈尊は言っている(田上太秀『ブッダ臨終の説法 2』p.345-346)。

ここで話を元に戻すと、釈尊が入滅を「三ヶ月後」としたのは、アーナンダの成道と関わっていると思われる。ここではアーナンダは、仏を前にしながらも悟りを開けない凡夫の代表として扱われている。そして釈尊は智慧の力でアーナンダが開悟するのが三ヶ月後だと見通したわけである。アーナンダが釈尊の教えを本当に体得したおかげで、私たちにも仏果を得る道が開けたのだと言える。